The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多松堂設立に關與した木村家について ： 臨地見學會前後の經緯より
Author(s)	山口, 正男
Citation	懐徳. 1970, 41, p. 70-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90486
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

多松堂設立に關與した木村家について

——臨地見學會前後の經緯より——

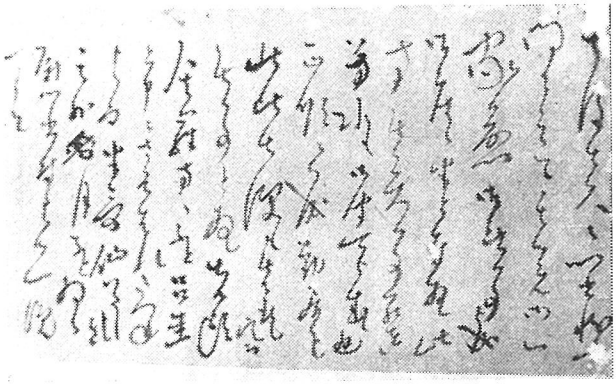
山口正男

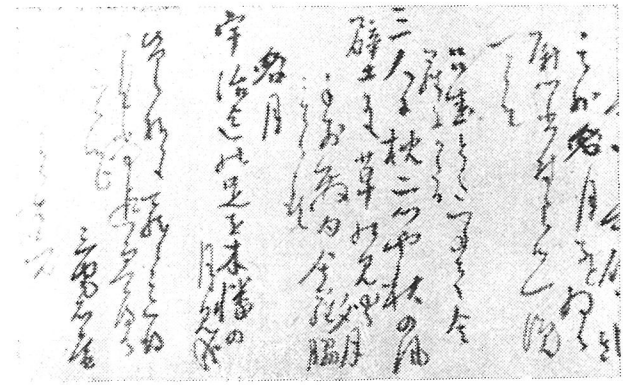
昨夏伊勢方面見學歸途、次期見學については酒井委員の提言を中心にした車中打合せに基づき琴平善通寺白峰寺國分寺方面を意圖した。以下處務を辿る。

十一月中旬金刀比羅宮圖書館宛漢籍を中心とした目錄を要請したところ、同館松原秀明氏より關係參考目錄二部と共に、三宅石庵（俳號泉石）を往時禮聘した讃岐琴平の羽屋平右衞門（俳號寸木・木村姓）という造酒家とその男平十郎のことに觸れた同月二十一日付のお葉書を拜受した。然も同氏も此の機に堂友會との照會調査作業を待望せられるご意向のあるを伺うことが出來た。

懷德第三十五號の石庵關係記事中に、木村寸木は藥種商らしかったとある記憶がよみがえり、前記造酒家の表現に引かれて私は先ずこれが探究の指向を定めた。受贈答禮に懷德第四十號、八尾の史蹟（八尾市役所）を呈送した。

十二月四日付にて、同氏より琴平町内のさる素封家に於て閲覽の屏風に貼られていた石庵の書簡寫眞と、驚き且つ喜びであったことは木村平右衞門、平十郎などの墓碑を寫眞撮影されているとのご案内に接したことである。實は漠然模索の心情であった私にはにわかに視界の展がりを實感した。堂友會に於ては或は諸先賢の既に觸れられた採取作業乃至は聞知のことにあらずやと自からを疑ってもみた。





三宅石庵の書簡

十二月十日付にて、同氏より（以下便と略稱）前記墓碑寫眞七葉拜受併せて次の「讃岐史談」抄錄を同封ご敎示下された。

「讃岐史談第二卷第二號」昭和十二年十一月二十日　草薙金四郎　編集兼發行

琴平五三昧墓地　大西一外（讃岐掃苔錄）

數年前、墓地整理の爲め、柳谷の新墓に併合、無緣墓は無緣塔に築造され、僅に私の提議を納れて、木村寸木と秦蕉齋の墓碑のみを保存されて居るが、五三昧墓地には、池大雅始め

諸名家の筆になった碑銘もあり、平琴の歴史を探ぐるには缺くべからざる箇所であった。この様に立派なものが、コンクリートですっかり塗りつぶされて、文化の琴平を誇るかに、柳谷の高臺に天空を摩して聳えて居る。併して私が五三昧墓地を調査したのは、大阪在住時代に屬し既に墓地整理も餘程進捗して居ったのでほんの一部それも主として俳諧方面に力を注いで居たということを特に斷って置く。

木村平十郎墓碑

○道閑之墓

木村氏、通稱羽屋平右衛門、名有綱、壁錢堂、一柳軒、若水子の號あり、高松の一三子に俳諧を學び、宗鑑流三世を稱し、才麿、惟中、惟然、舍羅、三千風、團水等と交り「金毘羅會」、「花の市」の著書がある。また元祿十二年、碩儒三宅石庵を禮聘して地方文化に貢獻するところ尠なからず、造酒家、正德五年乙未四月二十八日歿、享年六十九。

○貞閑之墓

木村寸木の妻、三好氏、歌俳を嗜む、享保十二年丁未六月九日歿、享年七十四。

○肅齋之墓

木村氏、名綱紀、稱平十郎、步才と號す、寸木の男、俳諧を父に、儒學を石庵に學ぶ、後ち懷德堂五同士と協力して、大阪に於ける石庵の講堂多松堂設立に醵金し、享保十一年懷德堂創設に際し寄宿舍一棟を建造寄進す、享保十二年丁未十一月廿六日歿。享年五十七。

○春翁之墓

木村氏、名綱守、稱忠藏、寶曆八年戊寅三月四日歿、享年六十四。

○靜山之墓

木村氏、名綱之、稱藤右衛門、天明四年甲辰三月廿二日歿、享年六十六。

○常山之墓

木村氏、名成總、稱清右衛門、安永九年庚子六月四日歿、享年六十。

（註）春翁、靜山、常山等の經歴は不明なるも石庵の嗣子、三宅春樓などと、交渉を有するにより、假に摘錄せり。

○閑齋之墓

木村氏、名成章、字士簡、稱主馬、竹内流の奥儀を極め、子弟を教授す、池大雅來琴滯留せり、天明七年丁未四月十日歿、享年四十七。

而して右文中、懐德堂五同志、多松堂に關し、また春翁、靜山、常山と三宅春樓との或は交渉のあったと推定されもする點につきご照會に接したので、春樓との交渉事情を豐中懐德堂藤塚誠二氏にご照會申上げると共に未詳の面に對し責の一端として、懐德第三十號、懐德堂要覽、船場第五號（船場の會發行）、石庵春樓墓碑寫眞を呈送した。

十二月二十三日便にて、六葉の關連寫眞と共に、更に快報をも齎らして下さったのである。卽ち池田逸翁美術館長でもあられる岡田利兵衞先生邸の柿衞文庫收藏の木村寸木が收集した短册帖に、泉石銘のものも含まれているとのことで、松原氏より岡田先生まで態々拜見可能のご許諾を得て下さっておられた。

今年一月三日には、松原氏のご丁重なる賀詞拜受、芳書中によれば、岡田家ご先祖の履軒門人であられた篤學の方の關係資料も多數ご寶藏とのご案内なのである。夏の臨地見學實施までには先生の御意を得た上で若干の有志委員は岡田邸に參上拜眉、親しくご高敎をも仰ぎおくの要あること及びその幸を意識して堂友會内關係筋にご連絡をすませた。

一月十三日付便にては、「ことひら」昭和四十一年新春號（琴平山文化會發行）のご惠送と共に、氏のご健筆は愈往時消息のお示しを進められている。先ず「ことひら」を拜見し圖書館參考事務控簿記事にて松原氏始め館各位の連日に渉るご繁忙を拜察して、木村家を中心とした關係主要資料抄錄他ご提供につき、初信以來まことにご懇篤なるご配意のこめられていることに感銘を受けた。

元祿十年、金毘羅の酒造家についての記錄を御高覽に供えさせて頂きます。木村家が一三軒あり、みな大きな株高を持っていたことが分ります。

この頃金毘羅別當金光院の住職は宥山といいました。

宥山は元祿四年から元文元年まで別當でいました。

宥山にはイワという妹があり、このイワの嫁いだのが、ほかならぬ木村平右衞門（寸木）の息平十郎であります。

金毘羅別當は、みな山下という家から出ることになっていました。山下家と木村家はともに生駒家の臣で、もとから姻戚關係がありました。

宥山は寶永五年から「金光院日帳」を書くことをはじめました。現存するのは寶永七年、正德元年と、享保二年から元文元

金光院日帳

年までのものです。これでみますと宥山が木村家へ遊びにゆくこと、木村家へ來た客を平十郎が案内して宥山に會わせにくることなどが出ています。

宥山は高野山の學僧義剛と親友でした。義剛は契沖と親しく、「契沖傳」の著があり、また義剛書寫の「文館詞林」が大東急文庫にあります。

今度慶應大學の阿部隆一先生が「文館詞林」を出版されたのにも義剛書寫本は大きく取りあげられているようです。

書庫には義剛が朱點を付した「覺禪抄」百二十卷があります。

宥山の舊藏書としては

韓昌黎集（萬治三刊）

柳河東集（寛文四刊）

などがあります。

「讃岐酒史」には「金毘羅酒」の一項があり、木村家が沒落してゆく過程がよく分ります。も少し先で復寫したいと考えています。

取り急ぎ亂筆にて失禮いたします。

一月十三日

松原秀明

一月十八日は新年第一回堂友會委員會を、準備を急ぐ萬博會場が間近かに望める千里丘の松下電器保健センターに於て開催した。木村英一先生を中心に全員出席、清朗有意義な議事の進行席上で琴平との（松原氏による）文通經過

と拜受諸資料の提示報告を行い、先生よりは關係先賢資料については懷德に登載の要ある旨併びに資料蒐集上の留意事項など拜聽した。

一月二十七日付便にて、寒中お見舞の辭を拜受、「讃岐酒史」のゼロックスを用意下されているご案内に加え、私の既往概念に多大の知見をお與え下さったのは、石庵の俳人としての一面の消息がうかがえるにいたる「ことひら」第一巻創刊號所載、次の注目すべく且つ興味ある抜錄のご惠送である。

「ことひら」第一巻創刊號

（昭和九年三月發行　大西千一編）

三宅石庵について　　大西一外

西村天囚博士の「懷德堂考」には、初代の祭主三宅石庵が年譜中、元祿十二年より正德二年まで十四年間と云うものが、全々白紙のままである。西村博士ほどの博學者に不明のものはもう如何ともすべからざるものと、あきらめながらも一種の物足りなさを感じていた。

ところが偶然にも、金比羅の木村寸木という俳人の著書元祿十三年刊の「金毘羅會」正德二年刊の「花の市」によって、石庵の年譜中不明の十四年間は金毘羅に在住していたことが判明した。

寸木は「金毘羅會」編纂のため、京坂の俳家を歴訪し集句に耽っているうちに石庵と知己になり、禮聘して金比羅に伴い歸り子息の歩才、蠅虎の薫育を托し傍ら近隣子弟の教養を依嘱したものらしい。

金毘羅會の序文に

讃松尾壁錢堂寸木叟自レ蚤深好三俳諧一以レ之吟レ風以レ之弄レ月其所以自適而興人樂亦皆在レ此卒以鳴三於鄕國一餘聲達三乎他方一今也集三百家之句一雜以三其レ所レ作而編成命曰三金毘羅會一　乃松尾之所レ有也鄕盛而世知レ之故以爲レ名

遊子泉石書干西讃寓舍

とあり「花の市」の跋文に、

花はうらねと花の市とは彌生にたては也花の市　花の市集は市とおなし名　名もおもしろしめされよ句もおかしめされよ風流の物賣その牙儈は泉石

と書している。牙儈はサイトリのことで、花の市は彌生十日、金比羅に催された市である。石庵の俳句は逸話文庫などに二三句擧げられているが、金毘羅會、花の市の兩集には左の十數句を數える。

川水はさうて流るゝ枯野哉　　泉石

雪に見よおれた所が竹の直　　同

踏石はふまれて年がくれにけり　　同

一日舍羅をいざなひて興泉寺の蓮池にあそぶ

蓮いけやはたに雀の糞ひとつ　同
涼風のいきて居るなり森の下　同

宮島の彌山にのぼりて

雪のみね裾にわかるゝ伊勢周防　同
山は人に川も醉けり花の市　同

雨にぬれうぐひすが鼻をとほる

春雨につらきは合羽すかた哉　同
さゝの葉にあるか風みる暑哉　同

旅人をかくまふて

涼風や幸橋をもどりほし　同
野あるきやにほひもへきの花晩稻　同
秋のくれ我ちからくさけふり草　同
柚は枝のこにかうてよし秋の園　同
寒菊と顏を見合す不破の關　同

乞食の寢るを見て

寢れはねるあのこも一重霜一重　同
水よりも寒しもとりの空一荷　同

石庵は觀瀾の兄で、寛文五年正月十九日京都に生れ、名は正名、字は實父、通稱を新次郎、別號を萬年と云い、幼少の頃から學事に志して、家業を顧みず、遂に家産を蕩盡して、兄弟相携え、江戸に出て淺見綱齋に師事した。學成って弟の觀瀾は水戸家に仕え、彰考館の總裁となり、のち幕府の儒官に擧げられた。石庵は學風か素行かの事に關して、綱齋から破門され暫く江戸に敎授を業として居たが、元祿十年頃京都に歸り、後ち大阪邊にも移居し元祿十二年の秋金毘羅に來住したものと推定される。

石庵は來琴後、儒學を講述して、子弟を薫陶し、金毘羅地方の文化啓發につき多大の貢獻があった。が一方には寸木の感化によって才子肌の石庵は傍ら俳句にも趣味を有つ樣になり、金毘羅在住十四年間は寸木を來訪する俳人とも交って、花鳥風詠の俳諧生活をも營んで居た。

石庵は此の金毘羅在住時代に寸木の媒介により妻携したものと思われる。それは石庵と木村一家の關係というものが、普通の師弟というよりもより以上に濃厚で、且つ如何に木村一家の知遇に感じたりとも一代の鴻儒たる石庵ともあらうものが、草深き南海の片山里に村夫子然として十數年の壯期を空しく安逸平凡に過そうとは思われないからである。のみならず其の孫裔は後年讃岐に土着しているところから推しても然う受取れる。石庵の妻岡田氏は、二男二女をもうけたが、長男の文太郎と二女は夭死し、末子春樓の生れたのは正德二年で石庵四十七歳、金毘羅在住時代に屬する。長男二女とも金毘羅で生れ、金毘羅で歿したようであるが、木村家の墓地たる五三昧が整理されて無緣墓が無緣塔に築き込まれて了ったので今は調査のしようもない。

石庵が大阪に居を移してから正德三年八月には大阪の富豪、三星屋武右衛門（中村良齋）道明寺屋吉左衛門（富永芳春）舟橋屋四郎左衛門（長崎克之）金毘羅の木村平十郎（歩才）木村平藏（蠅虎）等の諸有士が醵金して、表口四間、奥行二十間の家宅を買取りこれを石庵に提供し多松堂と稱して講會の場所と

した。

また享保十一年七月六日官許を得て懐德堂を創設し、石庵が祭主になったときにも、木村兄弟は塾の東北隅に二間に六間の長屋を建て、同人上阪の折の逗留所となし且つ遠方諸生の寄宿寮にあてた。

この様に木村一家は懐德堂五同士と共に懐德堂創立に盡瘁したということは、全く金刀比羅人士のために意を強くすべき事由である。

石庵はもともと市隱的の儒家で謠曲、報を善し、酒を好み座談に巧妙を極め、謙虛質朴能く人を容れ、自持儉素、常に綿衣を着して生涯絹布を用いず、營利を好まなかったそうである

同封六葉の寫眞中、柳東（日柳燕石）には娑婆歌でその偉風を想い、別葉漢詩に見られる署名、松陰主人なる人物のご照會に應えてはただちにその求索を進めた。

二月十八日付便にて、呈送の新宮涼庭傳（山本四郎著）、浪華儒林傳（石濱純太郎著）、懐德第三十四號、上方文化（市立博物館）、懐德堂記念碑及び日柳三舟先生墓碑寫眞、併びに東江誌（山崎恆雄編著）中の松陰事歴の抄記などに對するご挨拶と共に、懐德舊號記事に對し次の通りご指摘があった。平右衞門（寸木）正德五年乙未四月二十八日歿年六十九。平十郎享保十二年丁未十一月二十六日歿享年五十七。同封二十七葉の寫眞は菊地五山等多數の書畫のもので琴平坂田秀雄氏邸の屛風に見られる色紙類から態々ご紹介下さった。

三月上旬、琴平山文化會から松原氏のご配意により「ことひら」昭和四十五年新春號のご惠送に接した。圖書館參考事務控簿記事によれば近世俳諧史上の寸木關係資料に關連して諸先生のご動靜が散見される。既に昨年九月九日記事では松原氏により寸木と懐德堂との關係の調査作業のあったことが拜見できる。次いで十一月十一日記事には、琴が、つぎつぎに子供を失い、末子春樓は生れつき羸弱で其の前途を悲觀せざるを得なかった。そこで讃岐門人の勸めを入れて春樓の生計のために返魂丹と熊の膽丸を製し、これを讃岐邊に販賣せしめたので家道は、頗る富裕を致したが其一面には「儒者にあるまじき行爲」と嘲罵の聲をあびせられた。

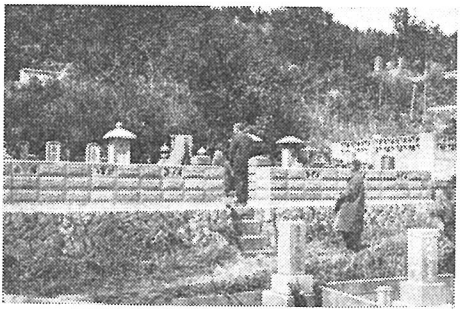
なお石庵の學風を評して禍學問と云いその首は朱子、尾は陽明、聲は仁齋に似たりと、これは諸說の長所を併用し稍々雜駁を免かれなかった弊を指摘されたものである。

かくて石庵は江戸の昌平聲に對する懐德堂という官學創設を置土產にして享保十五年七月十六日、享年六十六歲で大阪に歿したが大正八年文敎の功績により正五位を贈られた。

平郷土史家の大原和市氏と、大西一外氏により木村家墓碑確認にいたる動靜が掲出され且つ大阪より墓參のために訪琴された木村家ご遺族に奇しくも面晤されたることなど、今に生きる享保の人びと、との想いがしたのである。更に十一月二十六日記事には、木村家と金刀比羅宮別當との姻戚事情が琴平漆原俊三氏邸での松原氏の調査にて逐次明らかになっていっている。

さて三月上旬、懷德堂よりは金刀比羅宮社務所宛三月中旬堂友會委員の見學下見につき正式に依頼狀を發信下された。

三月十七日夜、加藤汽船にて酒井、山口兩委員出發、翌朝は富岡委員も參加し金刀比羅宮圖書館訪問、松原氏のご指導により金光院日帳に現われている木村家關係記事拜見、のち同氏及び大原和市氏のご誘導で寶物館、表奥兩書院、本宮、學藝館の參拜と視察を終え町の西端木村家墓地に赴いた。



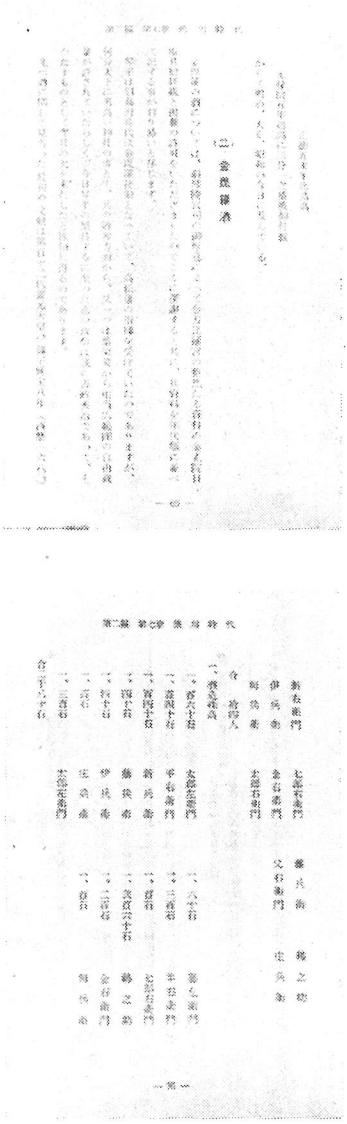
木村家墓地

次いで日柳燕石の記念碑、呑象樓を經て坂田秀雄氏邸を訪問、ご好意によりかねて用意下された祕藏中の屏風に貼られたる三宅石庵書簡及び日柳燕石書軸の多數を拜見、引續き漆原俊三氏邸にて寸木にかかわる山下家系圖等をご好意により拜見して一先ず宿舍虎屋に引上げた。

この日圖書館に對しては堂よりお預りの草茅危言、碩園先生集を酒井委員より贈呈の手續をとった。

三月三十日付便にて、「讃岐酒史」寫眞二十九葉にも及んでご惠送下された。造酒家としての羽屋平右衞門の石高にて當時の事情が推定される。同日大原和市氏よりご風格の偲ばれるご挨拶狀に接した。

四月十九日酒井、富岡兩委員は琴平のみの再度の下見の勞をとられた。

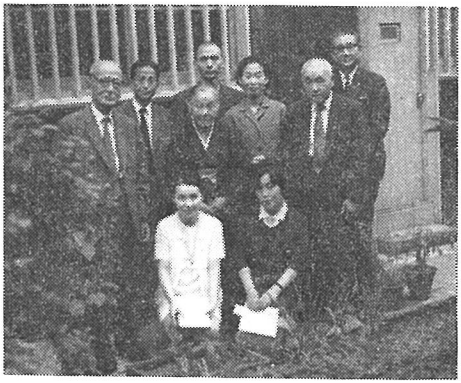


四月二十一日付便にて、いまに生きるなにわの人びと（朝日新聞社編）、江戸時代と大阪（有働賢造著）、註解出定後語（吉川延太郎著）、西村天囚先生墓碑寫眞呈送に對するご挨拶と共に、大阪市内大谷學園教諭櫻井武次郎氏が「俳人泉石としての三宅石庵」のテーマで六月開催の日本近世文學會にて研究ご發表のため木村家と石庵（泉石）との關係につき必要事項調査照會のご文通の趣も承わった。期せずして泉石、寸木に注目の研究家が然も新らしい調査角度にてご活動中のことを伺い得てまことに力強く且つ内心欣喜の情を禁じ得なかった。

六月七日便により、松原氏は前記學會にご出席を機に伊丹市岡田利兵衛先生邸にてご愛藏の石庵、履軒外懐德堂關係資料拝見のためのお誘いあり、尚ことに私の重視したのは、木村家後裔が大阪市生野區猪飼野ご在住で然も今回同家系圖ご持參の上岡田先生を中心に一同拝見いたすことになっているとの快報であった。

二十六日は松原、櫻井兩氏、木村家後裔の三婦人、酒井、富岡、山口委員それぞれに參集、岡田先生の慈愛あふるるご高教に接しつつ木村家系圖を親しく一同で拝見した。木村家側におかれても、懐德堂堂友會が今日なお往昔敬慕

えの注意あるところにいたく感銘しておられた。重ねて奇しくも思われてくるのは直接間接に關連目的えの各立場に於ける出發でありながら、はからずもこの參集會見に到り得たことが、岡田先生邸に於てであったことも意義まことに深く先師先儒のお引合せとも思えて追想一入である。尚お別れに際し先生より堂友會に對して、易經逢原一帙を下され有難く拜受いたした。



岡田先生邸にて

六月二十七日橿原市橿原會館に於て開催の昭和四十五年春季日本近世文學會研究發表會に許可を得て出席し櫻井先生のご發表を拜聽した。泉石が俳諧の交渉を始めたことや當時讃岐より來坂の事情等は寸木の影響をも受けているやの推論、含翠堂に關係ある泉州堺三宅家と京都三宅家との何らかのつながりの有無を究明して行きうるか、兩家とも藥種商に共通點あること等其他に觸れられ、石庵（泉石）の俳歴につき不明の部分を補うところに幾多の示唆を與えられたご高說を有意義且つ興味深く伺った。

七月一日便により、松原氏は在阪中の豫定行動の一部を割き、阪大助教授信多純一先生のご紹介をいただいて懷德堂文庫を參觀された旨のご連絡を拜承した。この契機が、寸木と石庵先生との俳諧交渉を通して殘された資料等の新發見に更に結びつくに至ることになればと衷心念願申上げたい。

七月十五日便にては、愈見學實施の近きに備えて松原氏により急遽大量五十部の次の要點貴重記事を編んで下された旨に添え、二部前送を賜わるのご配意があった。香川縣文化財專門委員香川縣立琴平高等學校教諭三谷敏雄先生よりも格別のご協力のあったことを感謝申上げる。

本誌　頁以下、松原秀明氏「金毘羅別家木村家の人人」參照

七月十九日夜、見學の一行は豫定通り辨天埠頭出帆、二十日早朝高松港にて先着の指導講師岡山大學齋藤孝先生を迎えて合流し琴電にて七時入琴、圖書館見學、表奥兩書院を拜觀、宮司琴陵光重氏に阪大清水潔先生外委員のご挨拶清談、のち一行は本宮參拜御神樂奉納をすませ寶物館學藝館參觀、虎屋にて晝食後バスにて木村家墓參、燕石ゆかりの呑象樓通過善通寺に至り、參詣と國寶等拜觀し白峰一泊、翌二十一日白峰寺、白峰陵など參拜五色臺經由國分寺見學、栗林公園一周を最後に夕刻高松港より乘船歸阪、總員四十五名。

白峰にて

七月二十日付便にて、見學當日呈上の懷德堂考（天囚西村時彦著）に對しご挨拶と共に、櫻井武次郎先生撮影の「木村家系圖」及び「木村寸木蒐集短册帖」の寫眞二十六葉のご惠送に接した。以上がその大要である。

今次四國方面の見學旅行は幸い天候に惠まれ無事有意義に終了したことは、神佛先師諸靈の加護と、金刀比羅宮社務所外各見學先當局を始め關係諸先生當事各位の、堂に對する深きご理解の賜と衷心感謝を捧げると共に、回顧すると昨年來現地貴重資料をおしみなくご提供下さった金刀比羅宮圖書館當局就中松原秀明氏の深甚なご配意のもとに全面に渉り絶大なるご協力に預り得たことに對しては、心から敬愛の念を表したく、尙其間にも各方面での見聞事情乃至は拜受資料の全掲載はこれを望みながらも紙面の制約でご紹介に及ばざりしことを深くお詫び申上げ今後もかわらざる諸先生のご垂教を切願申上げます。

（會員山口正男文責）